



『大学生と国際交流』
 : 四人のライフ・ストーリー
 <ナカニシヤ出版 2006.3>
 [所在] 図・開架・図書
 [請求記号] 377.9/D 16



花見 槇子 先生
 国際交流センター教授

世界のグローバル化が進むにつれ、異文化交流・多文化共生への関心がますます高まっています。三重大学にも、約260名の留学生在籍していることを皆さんはご存知ですか？本書は、三重大学に同時代に在籍した日本人学生4人が、留学生との関わりの中でそれぞれ成長を遂げていく様子を追いかけたライフ・ストーリーです。著者の花見先生にお話を伺いました。

「ライフ・ストーリー」という手法
 本のタイトルにもある「ライフ・ストーリー」とは何でしょうか。

社会科学の調査方法には、「量的調査」と「質的調査」があります。「量的調査」は主に「社会学」で使われる手法で、母集団からサンプルを抽出し、質問紙等で調査します。一方、「質的調査」は、古くは「文化人類学」の分野で発達してきた手法で、少人数を対象とし、インタビューや参与観察などで長期的に深く調査します。「ライフ・ストーリー」とは「文化人類学」の代表的な手法の一つです。一九九八年から二〇〇三年にかけてインタビューを重ねてきた四人の大学生が、それぞれ一人称で語る、という形式でこの本を書きました。

「人生の各ステージ」という構成

四人の物語が、「プロフィール」「国際交流事始め」「国際交流体験を経て」「留学と異文化体験」「卒業、新たな出発」と、「ステージごとに章立てされているのが、新鮮です。

一人ずつの話を章立てしても良かったのですが…。文化人類学者オスカー・ルイスの『サンチェスの子供たち』という作品があります。これはメキシコのある家族の四人の子供たちへのインタビューを元にして書かれた本で、子供たちがある時期に何を考え、どのように行動したのかを、人生のステージごとにまとめて描いています。学生たちとのインタビュー内容をまとめている時、この手法と構成が自然に浮かんできました。

本書の四人は同じ時代を三重大で過ごし、同じ留学生と付き合い、互いに密接な関係を持ち、影響し合っていました。そんな彼らのライフ・ストーリーを、時代ごとに区切ってまとめたら面白いのではないかと考えたら、すんなりマッチしていききました。

※「サンチェスの子供たち」：メキシコの一家族の自伝。オスカー・ルイス〔著〕 柴田穂、行方昭夫〔訳〕 みすず書房、1986 所在〔人文・社会〕 請求記号〔367.3/L 59〕

「社会学から文化人類学へ」揺れた学生時代
 これまでの研究について教えてください。

もともとは、社会学を学んでいました。農村社会学で戦後高度成長長期に、都市と農村の経済格差が広がった結果現れた「出稼ぎ」という現象について、東北地方の農村へ学生中心に二〇名位で出向き、夏休みの二週間、朝から晩まで調査票を用いた悉皆調査を行いました。夏休み明けには、統計的な集計作業をし、最終的に卒論としてまとめました。卒業後は、まずハワイ大学で学部時代の「出稼ぎ調査」のデータをもとに論文を書き、社会学の修士号を取得しました。

ところが、実はこの頃から、社会学的研究手法は自分に向かないのでは…?と思いはじめたのです。そこで惹かれたのが文化人類学でした。当時の私は、社会学と文化人類学は似ているから、社会学の修士号があれば、文化人類学の博士課程に入れると思っていたのです。しかし、進学した UCLA では「社会学と文化人類学は別ものです」と言われて。結局、文化人類学の修士号をまず取得し、その後、博士号も取ることができました。文化人類学に移ってからは、研究テーマも「東南アジア社会とジェンダー」に変えました。

キャンパスの中の異文化交流

——三重大学キャンパスにおける異文化交流についてどうお考えですか？

まだまだ留学生の数が足りないと思います。三重大学には約二六〇人の留学生在籍していますが、多くは院生で、学部の留学生と遭遇する機会が少なく、日本人学生から見たら「留学生はどこにいるの。」という感じでしょうね。それに人数が少ないことから、大学システムからも忘れられがちです。留学生を増やすためのインフラが未整備な部分もあって、難しい面もありますが、留学生数が全学生の二割になれば、状況がかなり違ってくるでしょう。

図書館でも留学生の方向けのイベントを実施する
 など、いろいろ試みているのですが。

イベント自体が珍しいですよ。企画するほうも肩力が入ってしまうし、留学生のほうも「期待に応えなくて」とプレッシャーになってしまう。もともと自然に、留学生が集まれる場があると、情報も行き届いていいのですが。

大学生と図書館

——図書館では、国際交流関係も含め、シラバス掲載図書は全て受け入れていますが、意外と知られていません。

今の学生さんは、あまり本を読む時間が無いのではないのでしょうか。十数科目も授業を履修し、バイトや部活動をこなして、とにかく忙しい。また、学生が図書から離れていくのは、図書館の環境も関係しているのだと思います。欧米の大学には、「リザーブ・アクセス」という制度があります。これは授業を履修している学生に、授業に関連する図書を優先的に貸し出す制度です。電子的なメディアも含め、学生の学習のためにより良い環境づくりをお願いしたいですね。図書館はそのためにあるのだと思います。

「一歩踏み出したい！」異文化交流体験

——学生さんへのメッセージをお願いします。

「異文化の人と話したい、知りたい」という潜在的な欲求は多くの学生が持っていると思います。海外旅行や留学に興味を持っている人は、とても多いですよ。しかし、本当にそこから一歩踏み出せる人は多くありません。やはり言葉の問題があるし、異文化に触れるのは不安もあるでしょう。しかし実は、日本の中にだって、世代・男女・地域間など、異文化的要素はあります。きっかけさえあれば、その一歩を踏み出せる人が増えてくると思います。踏み出してみたら、「あ、意外と楽しい！」と思える人も多いのではないかと思いますよ。

これだけは読んでおきたい READING * LIST 各学部の先生からのオススメ本

生物資源学部 高山進先生

栗原康 著
『有限の生態学』
 岩波書店
 [所在] 図・開架・図書
 [請求記号] 468/KU 61

太陽エネルギーを受け物質的には閉鎖系の地球は、生物とその環境との相互作用の結果 持続・恒常系を形作ってきた。栗原はわずか500ccのフラスコ内に半年ほど持続できる閉鎖系を造り出し、その安定の要因を考察している。30年前に表された書物でありながら、すでに地球環境問題を強く意識し、この「ミクロコスム」と人間社会とのアナロジーに基づき、問題解決の方向を提案している。1994年に「同時代ライブラリー」版で再販された。

人文学部 田中亜紀子先生

ミシェル・フーコー 著
『監獄の誕生 —監視と処罰—』
 新潮社
 [所在] 図・開架・図書
 [請求記号] 326.4/F 42

『監獄の誕生』とあるが、ヨーロッパにおける処罰の変容と監視について分析を加えながら、監獄のみならず、権力や規律、管理社会の構造解明を試みた興味深い一冊。フーコー入門書にして、今なお社会科学に関心を持つ人びとに大きな影響を与えている。文章表現上、多少わかりづらい箇所があるかもしれないが、口絵の面白さとともに本書のスケールの大きさを楽しんでいただきたい。

工学部 小竹茂夫先生

畑村 洋太郎 著
『失敗学のすすめ』
 講談社文庫
 [所在] 図・開架・図書
 [請求記号] 335.9/H 41

失敗が大切なのはなぜか？それは順調に見えていたシステムの欠点を暴く「反証」を与えてくれるからだ。これを読めば日常起こる事故をマスコミとは違った視点から眺めることが出来るだろうし、問題の本質を見抜く力を養う学問の大切さも実感できるだろう。ともしば細かな専門知識に惑わされがちな日々、「大学で何を学び、どんな専門家を目指すのか」を深く考えさせてくれる好著。

教育学部 弓場徹先生

弓場徹 著
『奇跡のボイストレーニング BOOK』CD付
 主婦の友社
 [所在] 図・開架・図書
 [請求記号] 767.1/Y 96

次のような欲求のある人に勧めたい。「音域を広くしたい」「声量をつけたい」「発音をハッキリさせたい」「歌音痴を治したい」「音質を改善したい」「ストレスを発散したい」「人前でかっこよく歌いたい」「将来歌を仕事にしたい」「新しい音生生理学のさわりを知りたい」など、つまり、声をよくしたり、上手く歌いたい人の本だ。方法はいたって簡単、まねるだけ。身に付いた技術は無形だが、確かに大きな宝物だ。

共通教育 尾西康充先生

田村泰次郎 著
 秦昌弘、尾西康充 編集
『田村泰次郎選集(全5巻)』
 日本図書センター
 [所在] 図・開架・図書
 [請求記号] 913.6/Ta 82/1 1-5

三重県四日市出身の田村泰次郎は、日中戦争では5年3ヶ月の間、中国大陸で従軍生活を送った。自分の体験にもとづいて一兵士としての視点から戦場の光景を小説に描き出した。戦後初期の「肉体の悪魔」や「春婦伝」などの作品、作家晩年の「蛙」「失われた男」などは、戦争小説として読み継がれるべき作品である。なお副読本として「丹羽文雄と田村泰次郎」(学術出版会)を併読すると、作品の理解が深まるだろう。

医学部 櫻井しのぶ先生

大平健 著
『豊かさの精神病理』
 岩波新書
 [所在] 図・開架・PB
 [請求記号] 146.8/O 29

この本の著者に私は精神医学を学んだが、私自身は大学時代一度も彼の著作を読んだこともなく、彼のファッションのみしか覚えてない不真面目な学生だった。その後、書店で題名に惹かれ手に取ったこの本を読んで、自分にも当てはまる箇所満載で引き込まれた。よろず相談のモノログとして語られる「モノ語り」内容は、バブル崩壊の今でも新鮮さを失っていない。「モノ」と人の精神との関係性を問うことで、自分のこころの有りようを見つめ直してみたいかがでしょうか？